

要 旨

学校教育と知能観の再考——“状況に埋め込まれた学習”の視点から——

橋本 憲尚

本稿の目的は、高度職能教育としての教員養成プログラム策定にあたり、その基盤となる理論的視点の提供にある。まず、教室における学習のしくみの前提となっている知能観（能力を個人内部に帰属させ、常に考えて見通しを立ててから行為するよう求める）に批判を加えた。次に、研究データ収集場面と教室学習の場面での人間関係の類似性に着目し、各々の場面において被験者・子どもに要請される行為のルールへの理解が課題解決の制約条件となっていることを指摘した。最後に、教室学習を“状況に埋め込まれた”ものとみなす観点から、“分散された知”という新しい枠組を紹介し、その主要な概念的事項として道具・プラン・コンテクストについて解説を施した。

格差社会における教育の民主化と協調自律学習の開発

西之園 晴夫

わが国では大学の授業料高騰が教育格差と社会的格差とを相互に助長する懸念があることが指摘されている。世界的にみるならば、変動社会の出現と職能の高度化に伴って、すべての国民に高等教育までを提供することが求められており、1970年代に国連で高等教育まで無償化することが決議された。しかし日本政府は無償化問題については奨学金などで対応するのでこの決議に拘束されないことを表明している。その後の学習に関する科学技術の進歩、ならびにユビキタス情報通信環境が整ってきたので、各国において新しい教育方法の開発が進んでいる。このような状況から協調自律学習による授業開発の方法論としてシンボリック設計法を紹介している。従来の授業開発が教育目標や教育内容が重視されていたのに対して、最近では学ぶ意味、学習活動、学習成果などのように学習者に視点をおいた方法にシフトしており、そのときの設計法を提案している。

現場体験活動は教員志望者の実践力を涵養するのか——学校インターンシップのもつ「効果」について考える——

原 清治

学校インターンシップやスクールボランティアなどの現場体験活動によって、教員志望の学生の資質を向上させる動きはますます広がりを見せている。一方で、実際に現場に入ることによって、学生のどのような実践的指導力を向上させるのか、という研究は僅少である。

本研究では、現場体験活動を行った学生への調査を通して、学校インターンシップによってどのような実践的指導力が向上したのかを明らかにしたうえで、それを定着させるためにはどのような取り組みが必要であるのかについて考察した。結果として、大学での学びと学校現場での実践をスパイラルに組み合わせることが、学生の実践的指導力の定着に効果をもたらすことが明らかとなった。

教員養成の一環としてのインターンシップ——佛教大学の事例を参考にして

谷川 至孝

本稿は、2005年度より本学が実施している小・中学校におけるインターンシップの経験をもとに、教員養成における「理論と実践の融合」の在り方、そして、そこにおけるインターンシップの在り方について検討したものである。

まず、インターンシップ導入の背景・目的、本学での実際を紹介し、そこから、インターンシップの問題＝「考えない教員」の再生産、を指摘した。そして、「近代科学の知」や「教師像」について論じた上で、「考え、決断する教師」を育成するためのインターンシップにおける「理論と実践の融合」の在り方＝「理論と実践の相互循環モデル」について考察した。

学びの継続を支援するための高度職能教育としての e-Learning

黒田 恭史

今日、高等教育機関への進学率の上昇と、社会的ニーズの変化等に伴い、高度職能教育としての大学教育の役割が期待されている。その実現に向けては、継続的な学び

と組織の中で主体的に貢献する習慣の育成が重要となる。本稿では、中等教科教育法「数学」を対象に、e-Learning の活用による学生の継続的・組織的学びと、学習効果について検討した。実践・分析の結果、明らかになったことは以下の三点である。第一に、e-Learning システムを活用したチーム学習による講義により、学生は主体的・継続的に学習に取り組むようになった。第二に、チーム学習における各個人の学習成果や貢献等が、e-Learning の活用により整理・蓄積されるため、それらを評価に反映することが可能であった。第三に、事後のアンケート調査より、こうした講義形式が学生間の相互交流や主体的な学習態度に好影響を与えることが示された。

「社会形成力」の育成を意図した小学校社会科授業

小林 隆

中央教育審議会答申（平成 20 年 1 月）を受けて、平成 20 年 3 月に新学習指導要領が告示された。今次改訂の流れの中では、「新しいものを創り出し、よりよい社会の形成に向けて主体性をもって、社会に積極的に参加・参画し、課題を解決していく力を身につけること」が授業実践上の課題として挙げられている。本論文ではこのような力を「社会形成力」と呼び、①キャリア教育との関連の考察 ②棚橋健治氏の社会科授業論の分析・考察を通して「社会形成力」の育成を意図した社会科授業論を整理した。そして、具体的な授業のあり方を古市和臣氏の実践に基づいて説明した。社会的事象や問題を知り、わかるだけでは「社会形成力」は育成できない。社会的事象の背景をよく考え、自身の意見や考えを持ち、表現しながら社会への参加・参画のあり方を考えることが求められる。

〈研究ノート〉

高度専門職としての教職

田中 圭治郎

専門職としての教員がどのようにして養成され、また現職教員の再訓練がいかになされているかを国際比較する。まず、教員養成について。アメリカの教員養成は、日本と同様に教育大学（教育学部）だけでなく、さまざまな高等教育機関でおこなわれている。イギリスでは、（１）大学の教職課程、（２）大学卒業後１年間での教職課程、（３）大学卒業をしていない、すなわち学士の資格のないものが教育現場体験を

重ねて教員になる3つコースがある。フランスとドイツは教育大学で教員養成がなされている。これらの国々は近年より質の高い教員の養成を目指すようになり、教育実習をはじめ教育現場でのトレーニングを厳しくしている。つぎに現職教員の再訓練について。アメリカでは免許更新制が導入されており、現職研修プログラムが重視されている。イギリスでは、教師一人ひとりに自己の実践記録簿の作成を義務付けている。フランスとドイツでは、教員養成に力を入れているが現職教員研修はあまり重視されていない。

〈研究ノート〉

「体験型教職実践の効果測定」としてのライフヒストリーの活用

達富 洋二

学生が社会現場に参加する体験型の授業は、大学での理論知と学校現場での実践知を融合させる機会として、学生にとっては有意義なものであるが、そこでの評価は十分とは言えない。現場での学習体験が学生の教職への学びの文脈に組み込むためにも、評価の仕組みの改善は必要である。

本研究では、ライフヒストリーの記述を評価のための方法の一つとして活用し、二つの留意点を明らかにすることができた。一つは自己評価としての学生の記述力である。事実をとらえる力と記述する力が必要である。もう一つはライフヒストリーの記述を読む者の量的な読み取りと質的な読み取りの資質や能力の問題である。

より客観性をもつ測定を可能にするために、読者の能力の質を高めること、様々な読者による複数回の測定を行うこと、他の学究的手法を取り入れることを取り入れ、実証的な研究を継続していくことが必要である。

〈調査報告〉

京都市中京区中心地区マンション住民の実態と意識——マンション・アンケート調査の結果分析——

関谷 龍子・瀧本 佳史

京都市の中心地区では、マンションの建設ラッシュにより、都心部への人口流入という現象が生じており、新住民と既存の地域社会との関係性の構築が課題となっている。そこで、この地域でほとんど行われていなかった、マンション居住者を対象とし

た生活実態把握のためのアンケート（定量）調査を実施した。調査期間は2005年8月から2006年1月にかけてで、中京区内の3つの学区内にある分譲マンション62棟、2806世帯を対象にした。有効回収数は801であった。調査報告であるため、個別の調査結果や分析は、本文にて述べることにする。

〈研究ノート〉

人口の都心回帰と新しいコミュニティ形成の課題

浜岡 政好

京都市の中心区は高度成長期以降人口の減少が続き、いわゆるドーナツ化現象が生じていたが、バブル経済の破綻後の1990年代後半から一転して、マンション・ラッシュによって大量の新規住民が来住することとなった。このマンション居住者と旧来の地域住民をいかに融合して新しいコミュニティを形成するかが重要な地域課題とされてきたが、この2つの住民層の融合は必ずしも順調ではない。小論では中京区田の字地区のマンション住民へのアンケート調査結果や行政、地域福祉団体等へのヒアリングなどをもとに、新しいコミュニティ形成の課題を整理した。

〈研究ノート〉

都市中心部の自営業層の営業とくらしの実態——コミュニティを支えてきた自営業層の現状と課題——

金澤 誠一

本稿は、これまでコミュニティを支えてきた自営業層の営業と暮らしの実態を分析することが主な目的である。「構造改革」の下で、大店法に代わり大店立地法が施行され、大型店の大幅な立地規制緩和が進んだ。その結果、多くの商店街が衰退を余儀なくされ、シャッター通りとなっていく。京都市および中京区の商店街も例外ではなく、売り上げの減少、高齢化、後継者難の問題を抱えながら衰退している。また、グローバル経済の中で、京都の地場産業である京都友禅などの繊維関係の自営業者の衰退も著しいことが実証された。

しかし、まちづくりを住民の福祉の増進にあるとする観点からすると、高齢化が進む中で、移動すること、社会生活に参加することといった「生活の質」を達成するためには、商店街や行政、医療、教育、福祉などの都市機能が分散することなく、包括

的に確保されなければならない。「まちづくり三法」の改正（2006年）により、歩いて暮らせる「コンパクトなまちづくり」へと転換が図られ、住民主体によるまちづくりが始まろうとしている。本稿は、持続可能なまちづくりとは何かを考えるための第1歩である。

〈研究ノート〉

京都市行政の対応と課題——都心部のマンション増加をめぐる対応を事例として——

田中 志敬

マンション建設とその居住人口の増加に伴う京都市都心部の建造環境や地域社会の再構築は、地域社会の住民による自治やまちづくり活動での対応のみでは限界がある。こうした中で、京都市行政は基本計画等の中で位置づけ、各行政部署では景観、建築、管理、ルール、まちづくり、自治など、様々な切り口から具体的な取組がはじまっている。この再構築をめぐる京都市行政の対応には大きく3つの課題を指摘できる。一つ目は各部署間の情報共有が充分ではなく、関連する業務の連携が難しい。二つ目は賃貸マンションの管理の支援する担当部署は京都行政にはないため、行政対応上の穴となっている。3つ目は京都市行政として京都市の地域運営上で、町内会や自治連合会などの自治組織の役割をどう位置づけ、その合意形成や連携関係をつくっていくかという課題が挙げられる。

カルマチャクメーの浄土思想とその影響——ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版——

中御門 敬教

本稿で扱う『極楽国土経』(*b De ba gyi zhing gi mdo*) は、ゲルク派のギェルケンポ・タクパギェルツェン (*rGyal mkhan po Grags pa rgyal mthsan. 1762-1837*) が、カルマカギュ派のカルマチャクメー (*karma Chags med / Rāgāśya. 1613-1678*) 著述の『清浄大楽国土誓願』(*rNam dag bae chen zhing gi smon lam*) から三・四割程度を引用した読誦簡略版であることが、今回の調査で新たに判明した。本稿ではその『極楽国土経』の翻訳、本文、『清浄大楽国土誓願』との対応箇所について整理紹介を主に試みた。また『極楽国土経』のタイトル内にある「経」との関わりから、チベット仏教における「経典要約」形式についても言及を行った。

What is Difference between *Sukhāvatī* and *Jingtu* 淨土？

Yue XIAO

The present study is a comparative study between *sukhāvatī* and *jingtu* 淨土. The study includes four parts.

First of all, a brief discussion on why Kumārajīva did not indicate *sukhāvatī* should be labeled by the term *jingtu*.

Secondly, focusing on what the meaning of *sukhāvatī* in the *Dà āmítuó jīng* 大阿彌陀經, and pointing out that the *sukhāvatī* means measureless light and measureless wisdom through its connection with the name of *āmítuófóguó* 阿彌陀佛國.

Thirdly, a further survey on what the origin of *jingtu* is. In addition to *Xūmóti* 須摩提 and *Ānlè* 安樂, the name of *sukhāvatī* is also labeled as *Wúliàng qīngjìng fógúo (tǔ)* 無量清淨佛國 (土) in the *Píngděng júe jīng* 平等覺經. Because *qīngjìng* 清淨 is similar in meaning to *ānlè* 安樂 in traditional Chinese culture, 無量清淨佛國 must be derived from the Name of the Buddha, *Wúliàng qīngjìng* 無量清淨, in the *Píngděng júe jīng* in order to correspond to *anle*.

Finally, through evidence supporting the thesis that the term *jingtu* is derived from Chinese traditional culture as in traditional Chinese culture, *qīngjìn* 清淨 “pure”, is similar in meaning to *ānlè* 安樂, “at ease and pleasure”, to *zìrán* 自然, “nature”, and to *wúwéi* 無爲, “no-ado”.

〈研究ノート〉

随自顕宗・随他扶宗について——大玄『浄土頌義探玄鈔』を中心に——

東海林 良昌

「随自顕宗・随他扶宗」の語は、浄土宗第七祖聖岡（一三四一～一四二〇）の教学を特徴づける概念として広く用いられている。すなわち「随自顕宗」とは、自宗の経論や論理を用いてその立場を明らかにすることであり、「随他扶宗」とは、他宗の経論や論理を用いて自宗の立場を扶助するという意である。言うまでもなく、聖岡は、教団の組織面と教理面において、浄土宗一宗の独立を基礎づけたとして評価されてきた。しかし、特に教理面で、二祖三代の教学とは異なる独自の論理を展開させていることから、これまで細心の注意をもって取り扱われてきた研究史がある。本稿では、

聖岡教学に対する代表的な見解として、江戸時代中期浄土宗を代表する学僧の一人である大玄（一六八〇～一七五六）の思想を取り上げ、聖岡教学に対する分析や「随自顕宗・随他扶宗」の語について考察を行った。

〈研究ノート〉

高麗の偽経『現行西方經』について

山中 行雄

『現行西方經』は、高麗で成立した偽経で、海東永州公山の元（「日」の下に「山」）が録したと伝えられる。本書は阿弥陀・浄土信仰を背景とする占法を説く文献で、浄土における上品上生から地獄界に至るまでの来世を、木片を使用して占う方法を詳解している。

本書は高麗の浄土信仰に基づく儀礼を伝え、高麗の浄土信仰の一面を伺わせる貴重な資料である。本書の背景には、新羅時代より始まる「占察法会」があるとされてきた。

本稿では、『現行西方經』中に引用される文献を検討し、本書がむしろ『慈悲道場懺法』と強い関係を有していること、また本書が禅典籍の知識—不正確ではあるが—を有する人物によって編されたことを指摘する。

『浄土述聞鈔』の成立背景——良暁の念仏観——

伊藤 茂樹

良暁が撰述した『浄土述聞鈔』という著作は名越善導寺の尊観との教学論争のもとに成立した書であり、良暁が千葉東氏の庶流である海上氏の要請により下総の称名寺に滞在したときに書かれた書である。海上一族が本拠とした海上地方は父である良忠が教化した場所でもあるが、良暁はこの地で檀越への意向のままに追善廻向と浄土教講述に従事した。

またこの地で説く良暁の念仏は諸行往生を肯定した念仏であり、在地全体に受け入れられる念仏であったと考えられる。本稿では御家人層に受け入れられた専修念仏の意義を探るべく、海上一族に受け入れられた良暁の念仏について考察し、『浄土述聞鈔』撰述の背景を探っている。

『摧邪輪』における「以_二聖道門_一譬_二群賊_一過失」についての一考察

米澤 実江子

明恵が『摧邪輪』において「以_二聖道門_一譬_二群賊_一過失」として批判するのは、『選択集』第八章における法然の「言_二一切別解別行異学異見等_一者是指_二聖道門解行学見_一也。其余即是浄土門意」という解釈である。本稿は、明恵の批判内容（明恵の善導観）等を検討し、『摧邪輪』における『選択集』批判の意義を考察し、法然の善導義解釈への批判は、それを端緒として『選択集』ならびに立宗の否定へと展開し、最終的に、悪世においても王法と仏法との相依関係による末法の克服を明言するものであったと考えるものである。

中世叡山の戒律復興——律僧恵尋の思想と国家観をめぐって——

船田 淳一

近年、中世の律宗・律僧に対する関心は高く、多くの研究が蓄積されているものの、いまだそれらの中心は叡尊・覚盛ら南都の戒律復興僧が占めていると言って良い状況にある。そこで本稿では、叡山の戒律復興運動に対する一考察を試みる。具体的には叡山における律僧集団である「戒家」の劈頭をなす、恵尋を主たる対象に据えるものであり、特に戒家の戒律思想が国家観念と結合していた点に注目したい。これは叡山の戒律復興運動を中世思想史の中に位置づけるための基礎作業である。